

ふた

1. クサギの虫

クサギの花が咲き始めた8月上旬、幹や枝に丸いかさぶたのような木くずがついています。手で剥がすと、帽子のような感じで取れ、下には大きな穴が見えます。キャップのような木くずは、糞と木くずを糸で綴ってあるためバラバラになりません。正体は穴の中にいるコウモリガの幼虫が作ったもので、剥がしてもまた作って蓋をしてしまいます。

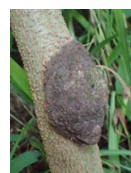


クサギの開花



コウモリガ幼虫

この幼虫は6月にクサギの幹・枝に穿入し、幹の中心を下に向かって食い進んでいきます。翌年の夏に羽化するため6~8月は大きい蓋と小さい蓋が同時にある幹を見ることができます。大きな幼虫になりますので、これを「クサギの虫」とよんで焼いて食べていました。「鉄砲虫(カミキリムシの幼虫)」と同じように高タンパク質の食品として利用したのです。表面の皮は香ばしく焼かないとかみ切れません。



穿孔の蓋



羽化殻のある蓋

成虫は昼間コウモリのようにぶら下がったままで活動しないため、気づく機会がなかなかありませんが、穴の出口すなわち蓋の部分で9月に羽化しますから、羽化殻のついた糞の蓋が残ったものは見られます。

2. カルス

かつての打吹山には一周できる道はありませんでした。打吹公園からは、鎮霊神社からまっすぐ頂上を目指す道があり、大江神社からは裏の谷を横切って西側の斜面を登り、次の谷まで行けましたがそこで終わりでした。スダジイの大木の多い林を過ぎると、その先は長谷の下側の展望台周辺、現在サクラやハクモクレン等が植樹されている範囲が一面のササ原となっていました。

1970年、現在の遊歩道が作られた時、斜面を削った法面にある根は切断されました。その時できた切断面は新しく作られた樹皮によって保護するように修復されてきました。50年以上たった今もその痕跡はわかります。



切断面の修復途上



タブノキの根

樹木が枝や根に傷を受けた時、感染源になる傷口をふさぐために傷痕組織(カルス^{しょうい}という)ができます。樹皮下の形成層などにある柔細胞(生細胞)が増殖して何にでも変化する細胞塊となります。やがてこの細胞はコルク化して樹皮になっていきます。コルク化した細胞壁は水分を通さず、細菌や菌類の侵入をも防ぐため、内部を守ることができるのです。



モミの根

樹種によって、カルス形成能力に強弱があります。カルスによって包まれ再生した樹皮は周囲から中心に向かって伸長してきますから同心円状の成長痕が残ります。遊歩道のスダジイやタブノキ、ツバキは修復できていますが、モミは覆い切れず材が腐食しています。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2025)